

---

# SILENT EVE

秋風 冬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SILENT EVE

### 【Nコード】

N3866I

### 【作者名】

秋風 冬

### 【あらすじ】

主人公、藤崎<sup>ふじさき</sup> 三月<sup>みつき</sup>はごく普通の高校2年生。

そんな彼は不幸にも出会ってしまう。

月明かりが綺麗な人気のない夜道で……  
人ではないものに。

## 昼寝と友人

「退屈だあ」

「退屈なんだよあ、わかるか三月？この気持ちが！」

「.....」

俺の名前は藤崎<sup>ふじさき</sup> 三月<sup>みつき</sup>。

普通の県立高校に通っている普通の高校2年生。

趣味は寝ることで、特技はどんな状況でも眠ることが出来ること。

そんな、特別何かが優れているわけでもない、平均的な16歳の男子だ。

ちなみに.....

さつきから俺の安眠を妨害しようとしたやつは、吉田<sup>ヨシダ</sup> 浩太<sup>コウタ</sup>。

なぜだかわからないが、こいつと俺は小学生からずっと同じクラスという、これぞまさしく腐れ縁というやつだ。

昼食を食べて、暖かい太陽の光を浴びながら昼寝をしようとする俺にとつて、この青年は邪魔でしかない。

いや、本人も邪魔をしているつもりなのだろう。

「わかんねえよ。というか、うるさい！」

俺の殺気立った目を見て、青年は一瞬ビクッとひるんだが、すぐに元の調子に戻ってしまった。

「いやいや、こんな気持ちのいい陽ざしの中で、なんで昼寝なんか

するんだよ！ せつかくの昼休みだつてのに。」

「昼休みに何をしても俺の勝手だろ！ なら好きにさせるよ！」

「いや、だからな………」

俺があれほど言ったにも関わらず、こいつはまだブツブツ俺を説得しようとしている。

正直、ホントにうるさい。

もう相手をするのが面倒になったので、俺はこいつを無視して眠ることにした。

昼休みは、あと30分くらいだから、まだ十分眠る時間はあるだろう。

そんなことを考えていると1分も経たずに、意識という現実と繋がった線は切れてしまった。

## 夕日

「・・・・・・・・・・眩しい？」

閉じた瞼まぶたから光が溢れてくる。

たまらず瞼を開けると、そこは光で溢れていた。

窓から差し込む夕日は、教室を紅の世界へと変えていた。

腕時計を見ると、時刻はPM 6:30を表示していた。

「おいおい、いつの間に・・・・・・・・・・」

ついさっきまで昼休みだったはずなのに・・・・・・・・・・

ということとは、午後の授業は全部さぼったということになる。

「やっちまった。明日は完全に呼び出し確定だな」

教室内には俺の他には誰もいない。

つまり、あの自称親友は俺を起こさずにさっさと帰宅したらしい。

「あいつ・・・・・・・・・・明日、絶対に一発殴ってやる」

明日のやることを決めて、これからどうするかを一応検討する。  
いや、検討することなんてないか。

とりあえず、早めに学校から出よう。

もし、教師に会ったら確実に職員室に呼ばれて説教だ。

そう思い、机の中の荷物をまとめて鞆かばんの中にしまい早足で教室のドアまで行き、ドアに手を掛けると同時にドアが勝手に開いた。

その先にいたのは、

「石黒先生！」

担任の先生だった。

「おお、ようやく目が覚めたか。というか、今から職員室だ。いいな？」

「……………はい」

2時間後

「よし、もう帰っていいぞ。あ、そうそう明日までに反省文10枚書いてこいよ」

「……………はい」

そう言い、職員室を後にする。

悲惨だった。多分、今の俺の顔はさぞかし酷ひどいだろう。

説教2時間＋反省文10枚

これが、居眠りの罰。

「酷すぎる……あんまりだ」

涙目になりながら靴箱まで行ってようやく気がついた。

「おいおい、もう8時過ぎてるじゃん」

先ほどまで紅色に染まっていた空は、完全に黒く塗りつぶされ月のほのかな光だけが空に浮かんでいた。

仕方なく、徒歩で最寄の駅まで歩いていく途中に気がついた。

「なんか、今日はやけに静かな様な……」

そうだ。

普段は車が行き交う国道も車は勿論、もちろん人っ子一人いない。

その不自然な光景に俺は目を疑うしかなかった。

不自然だ。あまりに不自然すぎる。

まあ、ともかく今は駅まで歩こう。

仕方ない。とにかく歩こう。今はそれしかすることがないんだから。<sup>5。</sup>

そう思い、月明かりに照らされながら歩いていると、突然体が重くなり倒れそうになった。

「……………気持ち悪い」

突然の目眩<sup>めまい</sup>で、思わず地面に膝をついてしまった。

そして、月影によって照らされて伸びた影。

「なんだ？ これ？」

思わず顔を上げると、そこには、細長く伸びた<sup>たいく</sup>体躯に細長い手足。そして、一番印象に残ったのは、顔のある部分。

その、普通なら顔のある部分には……………昆虫のバッタの頭のようなものがあつた。

## モンスター

「おいおい……………冗談だろ」

……………なんだこいつは？

今、俺の前方には一人の人間……………ではなく、一人の化け物が立っている。

いや、一人とは言わず、一匹と数えるのか？

まあ、そんなことはどうでもいい。

とりあえず、誰でもいいからこの状況を説明してくれ。

このままじゃ、現実逃避しちまうぞ俺は……………

俺がそんな一人やりとりをしている間に、その化け物は俺の前方1m程のところに立っていた。

確かさつきまで5mくらいこいつと俺の間にはスペースがあっただけだ。………？

俺が化け物に呆気にとられていると、今まで垂直に正面しか見つめていなかった頭が少し下に俯く形になり、俺と目が合った。

すると、そいつは口裂け女もビックリなくらい口を裂いて俺を見て笑った。

その剥き出しの口に生え揃った、鋭く尖った牙。

……訂正しよう。

こいつは人間とバツタに加えてサメの要素も入った怪物だと。

そいつが、今にも俺を食べようと裂けた口を大きく剥き出しにして俺を食べようと、ゆっくりと近づいてくる。

俺は逃げようとしたが、あまりのことに足が震えて立つことすら出来ない。

情けない。

どんなヘタレだよ俺。

そして、俺に怪物の息が吹きかかるくらい近づいて、俺は諦めた。

死

・・・・・・・・死

誰がどう考えたって、この状況でその言葉が浮かばないものはいないだろう。

俺と怪物との距離は、息がかかるほど、つまり30cmほどの距離だ。

その剥き出しの牙は、今にも俺の体を噛み砕こうと近づいてくる。

それでも、『死』という恐怖ではなく、あるのはただ死ぬのかという焦燥感。

いや、それを恐怖というのか？

まあ、今更そんなことはどうでもいいや。

今更どんなことを考えたって、死ぬことには変わりはない。

もう、残された選択は『死』くらいしか残されていないのだから。

・・・・・・・・短かったな、俺の人生。

てつきり、もっと長生き出来ると思ってた。

いや、それが普通だと思っていた。

今までの『日常』が長く続きすぎていて、そのことが当然のよう  
に思っていた。

……でも、違った。

日常は常に死と隣り合わせだったんだ。

死ぬ直前になって、ようやく気がついた。

ああ………今までの生活は奇跡で成り立ってたんだ。

そして、その奇跡もここで終わり。

人生の終止符が、今まさに打たれようとしている。

そして、俺は………

目を閉じた。

## 死（後書き）

初めまして………といふべきなんでしょうか？

今回、初めてあとがきを書かせて頂くんですから、初めましてでいいですよね。

まあ、挨拶はさておき、

今回は人間の死に向き合ったときの感情を題材に書かせて頂きました。

やっぱり、どんな生き物でも自分が生と死の狭間ギリギリに追い込まれたら、こんな感じじゃないかと思い、想像しながら書いてみました。

次回が最終回になる？………かどうかはお楽しみです。

それでは、また今度。

ご愛読、本当にいつもありがとうございます。

またのご来場お待ちしております。

## 生存

.....

俺が目を閉じてから1秒も経たずに、俺の頬ほおにぺチャという音とともに何かが付着した。

その何かは、頬から少しずつ下へと垂たれていった。

それから、考えるとおそらく液体だろう。

しかも、その液体へかなりの異臭いしゅうを放っている。

恐おそる恐おそる目を開けると、そこにはまだ怪物が俺の前に立っていた。

いや、正しくは立ったまま死んでいたの間違まちがいだと数秒後気づく。

怪物からは何の反応もなく、死んでいるのだと実感した。

怪物の体からは、ナイフのような鋭利えいりな刃物が何本も背中から腹部前面へと貫通していた。

そして、俺に付着した液体は怪物の血だということもこのときわかった。

その瞬間、突然の嘔吐感に襲われる。

目の前に佇たたずんでいる怪物の死体と、この血液の放つ異臭のことを

考慮すれば、それは極普通の反応だろう。

必死に嘔吐感を堪えていると、前方から足音が聞こえてくる。

この無音の世界において、微かな足音でもずいぶん大きな音に聞こえてくる。

そして、その足音は少しずつこちらに近づいてくる。

顔は上げず、視線だけその方向に向けると、歩いてきたのは全身に黒の衣装を纏った人間だった。

この状況では男女どちらかはわからないが、人間であることに変わりはないようだ。

「助かったのか……俺？」

その安堵もつかの間、俺の体が重力に逆らって宙を舞う。

「エッ!？」

俺の驚きの声も虚しく、俺は宙を舞ったまま何の抵抗も出来ずに、左前方にあった電柱にすごい勢いで叩きつけられた。

電柱に激突すると共に、俺の意識は現実と切り離される。

俺が最後に見た光景は、黒い衣装を纏った人間。

前方に飛ばされたおかげでわかったことが一つある。

人間の手に握られていたのは、先ほど怪物の体を貫通していた刃物。

あの人間が怪物を殺したということ。

そしておそらく、俺を飛ばしたのもあいつだろう。

## 生存（後書き）

なんとか命を取り留めた三月ですが、この後どうなってしまうのでしょうか？

とりあえず、この話しはここでピリオドを打ちたいと思います。  
と言っても、またすぐに連載は続けますけど。

ここから先は、今まで以上に描写が残酷なものになりそうなので・・・  
・・・（笑）

どうも今までにご愛読ありがとうございました。  
これからもどうぞよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3866i/>

---

SILENT EVE

2010年11月19日22時10分発行